

若い教師のために③

訊き上手

学力研究常任委員 深沢 英雄

一、「聞き上手」から「聴き上手」へ

「聞き上手になるのは」自分が受け入れることです。これが大事なことは先月号でお話をしました。

「聞く」は一般的に「向こうから勝手に流れてくる言葉を、受身的に聞く」場合に用いられます。「聴く」は能動的・積極的に耳を立てて「キク」場合にもちいられます。そういう意味からすると「聴き上手」という表現がいいのかもかもしれません。傾聴です。「聴」の字源には「耳」「目」「心」が含まれているといわれますが、まさにその字のごとく、「耳と目と心できく」のが傾聴です。

【耳できく】 相手の言葉によるメッセージに最後まで耳を傾け、理解する。

【目できく】 相手の言葉以外の行動(姿

勢、表情、しぐさ、声の調子など)に注意を払う

【心できく】 相手の言葉の背後にある感情も受け止め、共感を示す。

そうすることで、内容を深く理解しようとし、その奥にある相手の考えや心情にまで触れることができます。

家本芳郎先生は、『人の話を聞くときは、まず丸ごと聞く。丸ごとというのは受容的に聞くことである。そのうえで、自己の思想や感情と対話する。人の話を聞いてのち、心の内にて対話すると、自分の感覚や感情や思想を刺激し、波立たせる。「なるほど」と納得することもあれば、「知らなかった」と新しい知識として吸収することもあれば、「……?」と疑問に思うこともある。ときに、「間違っではないか」と思ったり、「ぼくは反対だな」

そう思ったりすることもある。

人の話を聞くことは、このように、外界からの刺激、感覚や感情や思想を自己の内部に消化することなのである。そして、人は、そのことによって、自己を再創造することができるのである。』と言われています。

二、「聴き上手」から「訊き上手」へ

傾聴力の中には、「相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す」ことが挙げられます。ただ聞いているだけでもなければ、一方的に問い詰めてきき出すでもない。「聴き上手」と言われる人がそうであるように、受け身にならず、相手の話に相づちを打ったり、質問をしたり、ときには自分の考えも交えながら、積極的にアクションを起こして相手の話したいことを引き出す姿勢が、社会人として必要な傾聴力と言われます。

つまり「**訊き上手**」になることです。

「訊く」の中にはひたすら質問して相手

を追い込むような態度「尋問」か「詰問」するということもありますが、ここでは、質問する「ask」の意として考えたいと思います。「不明な点を訊く」「訊き返す」など、いずれも質問です。「訊く」は「聞く」や「聴く」と違い、「質問する」という能動的な言葉です。

三、教師の力量アップは「訊く」こと

〜若い先生の特権〜

若い先生の特権は「訊く」ことです。先生になって短い年数の頃は、ほとんど「訊く」ことです。「訊く」のは今です。

まずは、同じ学年の先生に「訊き」ます。学年のまとめ役の先生に、しっかりと「訊き」ましょう。自分で考えて動くということも、もちろん大事なことです。それは基本ができてからです。社会人としての気配りはほとんど自分から進んでしないとダメですが、仕事の内容では、全くわからないわけですから、「訊く」ことが必須です。「訊き上手」が力量アップにつながる要因というのは、三つあります。

一つ目は、「訊く」ことによって、自分の

知らないことを知ることができるということ。自己成長のためには重要な役割を担っているのには間違いありません。

二つ目は、「訊く」ことによって、相手のことをより深く知ることができるということです。同僚に訊くことで、同僚は「自分を頼ってきてくれてるんだ」と普通はうれしくなるのです。教師は、基本的に教えるのが好きなんです。

三つ目は、「訊く」ことができる心の状態が、自分を成長させているのです。「訊く」というのは、時として、勇気が必要になります。「訊く」ことができるというのは、勇気があることなんです。

誰でも知っていることを自分だけ知らなく、それを誰かに訊く時、恥ずかしかったり、怖かったりします。思い切ってそれ訊いてみた時、「えっ、そんなことも知らないの……」とその人に言われてしまうかもしれないと想像することで、やめてしまいがちです。「自分がそれを知らない・わからない」でも「他の人はそれを知っている・わかっている」というのを認めて受け入れるのは、勇気がいります。それを相手に訊くの

には、もっと勇気が必要になります。恥ずかしさや劣等感や屈辱感といったネガティブな感情が心理的なブロックになるのです。知ったかぶりや逆ギレをすることなく、わからないことを「わかりません」と素直に言うことができ、「教えてください」と素直に人に頼むには、自分の無知と向き合って受け入れ、それをそのまま表現する強さと成熟が必要なのです。

「訊く」ときの礼儀があります。

一つは、笑顔で。②納得した時はうなずく。③視線を合わせる。④相づちをうつ。⑤「そうか」なるほど」とか。⑤メモを取る。

「訊かれた」人は、あなたに好印象を持ちます。そうすると、他の時に助けられたり、貴重な助言をしてくれたりすることあります。

学年の先生だけでなく、校長先生はじめたくさん先生のいいところから学びましょう。先輩の先生は、それぞれ素敵な面をもっています。その技や心を貪欲に、学んでほしいと思います。その姿勢を退職するまでの続けていって下さい。